

「もう泣かなくともよい」
ルカによる福音書 7章 11-17 節

ある母親の一人息子が若くして死んでしまいました。この母親はやもめでした。夫に先立たれ、母親の唯一の希望は、残された一人息子だけだったと思います。それだけに息子の死は母親を絶望の淵へと追いやりました。そして、その深い悲しみに覆われた葬送の行列にイエスさまは出会われました。

イエスさまは、悲しむ母親を見て「憐れに思った」と、聖書は記しています。福音書において、この「憐れむ」という言葉は、神さま、あるいはイエスさまにしか用いられていません。ですから、この「憐れむ」は、私たちが誰かのことを「可愛そうに」と思うのとはわけが違う、神さま特有の感情なのです。

もともとこの言葉は、「はらわたが痛む」という意味の言葉です。相手の悲しみ、相手の苦しみを思うと自分のはらわたがよじれ、苦しむほどに腹が痛む。それほどまでに、相手の悲しみ、苦しみを自分のもののように感じるのです。天地創造の父なる神、そして私たちの救い主イエス・キリストは、そういう御方なのです。

イエスさまは、この女性の苦しみをご自分の痛みとして、共に負って下さいながら、ひとこと声を掛けられました。「もう泣かなくともよい」と。これは直訳すると「泣き続けることをやめなさい」という意味になります。イエスさまは、「あなたは今絶望の中で泣いている。だけど、もう泣き続けるのはやめなさい。泣くのはこれで終わりだ。」と、こう語りかけたのです。

もし私たちが不用意にこういう言葉を口にしたら、どうでしょうか。たちまち怒りに満ちた反発を引き起こすことにもなりかねません。人の死の悲しみに慰めの声をかけることができるのは、主イエス・キリストただお一人だけです。なぜなら、イエス・キリストだけが、一人息子の命を再び与えることの出来る復活の力をお持ちだからです。

イエスさまは、棺に触れると、「若者よ。あなたに言う。起きなさい。」と言われました。イエス・キリストの言葉は、生と死の世界を支配する権威を持つお方の言葉です。その言葉には力があります。主の言葉は出来事となります。創世記における創造の御業が、主の言葉によってなったようにです。でも、そうだとすると、この時イエスさまは、わざわざ棺に手を触れられなくても良かったはずですが。

だけど、ここでイエスさまは、あえて棺に手を触れてくださるのです。死者の体や、その体を載せた棺に触れることは、律法によれば汚れることを意味しました。けれどもイエスさまは、人々が汚れを恐れて近寄らない、その死の世界に踏み入って、そこに手を伸ばし、触れてくださるのです。汚れること、巻き込まれることをいとわず、手を伸ばし、触れてくださるのです。癒してくださるのです。そして、死の力をも打ち滅ぼし、ご自身の支配の下に置いてくださっているのです。

「若者よ。あなたに言う。起きなさい。」

この言葉が決定的な形で語られる時が必ずやって来ます。その時、もはや死は完全に打ち滅ぼされて、人は新しい命に生きるようになる。イエス・キリストは、私たち一人一人

にも手を置いて「さあ起きなさい」と言ってくださるのです。私たちは、その時を望み見ながら、それぞれの人生を生きて行きたいと思うのです。

この時、イエスさまは、生き返った息子とその母親にお返しになりました。死んだ者に再び命が与えられて、母親に引き渡される。この驚くべき恵みの出来事の背後には、何があるのでしょうか。

それは、一人息子が取り戻され、やもめの絶望が拭い去られ、彼女らの新しい人生が始まるために、神の独り子が代わって失われているということです。この母親に代わって父なる神さまが涙を流されているということです。一人息子が取り戻されて、その母親に「引き渡されるため」に、神の独り子があの夜、ゲッセマネの園で「引き渡された」ということです。イエス・キリストは私たちの代わりに引き渡され、私たちの罪と死と汚れをご自身のものとして引き受けてくださるのです。

今、私たちが、失われた息子を再び返していただいたあのやもめのように、悲しみの果てから立ち上がり、神の恵みに捕らえられて新しく歩み出すことができるのは、神の独り子であるイエス・キリストが十字架に引き渡されて、私たちの受けるべき悲しみを引き取ってくださったからです。そして、それだけではなく、イエス・キリストは死に打ち勝って、復活をされたのです。そして、その復活の命を、希望を、私たちにも与えてくださるのです。「さあ、起きなさい」という御言葉によって新しい命を与えてくださるのです。

それだからこそ、そのイエス・キリストご自身がおっしゃってくださるからこそ、この言葉は本当の力を持つのです、「もう泣かなくともよい！」